老いの学習に関する研究

阪　本　陽　子

（文教大学付属教育研究所客員研究員）

A Study on Learning about Growing Older

SAKAMOTO YOKO

(Guest Researcher of Institute of Education, Bunkyo University)

要 旨

「老い」にはステレオタイプなネガティブイメージが根付いているが、「老い」の概念を捉え直していく学習が必要である。本研究では老いの学習について、子ども期を中心にその理論と実践方法を考察する。老いの学習理論を社会化の過程として捉え、その実践方法の一つとして世代間交流事業のあり方について検討を加える。

1．研究の視点

「老い」は生物学的にみれば衰退の意味が強く、一方では成熟や英知へ達するというような多義的な概念である。いづれにしても「老い」の焦点は高齢期に当てられる傾向が強い。「老い」は、ある年齢を越えれば突然訪れて、画一的な人間像を作り出すかの如く捉えられる。高齢社会に移行していく中で、生き生きと活動している高齢者の姿を目にするようにはなっても、現実的には、「老い」にはネガティブなステレオタイプイメージが根付いている。

しかし、高齢期の「老い」は、それ以前の人生と繋がって顕れるものであり、「老い」を人生過程と捉える視点が必要である。人は年を重ねる度に肉体的にも精神的にも、様々なものを得ながら、あるいは失いながら生きていく。蓄積や衰退を包括した「老い」という人生過程をどう捉え、自己や他者の「老い」とどう向き合っていくかは、人生の大きな課題なのである。

そこで、本研究では「老い」を高齢期のものだけと考えるのではなく、人生の連続した過程の中で捉えるための学習のあり方を、子ども期における学習を中心に検討する。ライフサイクルにおける子ども期は、親からの一定の独立を達成し、自己のコミュニケーション手段も獲得し得た時期といえる。この期を対象とすることで、「老い」を学習するということが、従来の「高齢期準備学習」の概念から外れ、「老い」に生き方そのものを取り込んで考えることができる。

本研究は、高齢者に対する福祉政策の研究や敬老思想教育を促すための方策を提唱するものではない。「老い」そのものの見方を変えるための学習のあり方を検討するものである。「老い」を連続した人生のプロセスとして捉える視点を、子ども期の学習に取り込んで考えてみたい。

2.「老い」の概念

私たちは日々年をとっているのだが、いったい人生のいつ頃から「年をとる」ことが「老いる」ことになるのかは明確ではない。「老い」の位置づけは亡羊としているものの、人生の後半にあるという漠然としたイメージを私たちは抱いている。

近年、老年学の周辺では「エイジング（aging）」という言葉が使われるようになった。「エイジング」という語は比較的肯定イメージとして捉えられ、「老い」とは異なる概念として用いる研究者も多い。しかし、「エイジング」という言葉は英語から来る外来語であって、日本語では「加齢」や「老い」に相当するものである。「エイジング」は、「老い」のマイナスイメージを払拭するための表現に過ぎない。外来語によって新たなイメージを創出するのではなく、「老い」そのものが何であるのかを捉え直す必要がある。

そこで、「老い」そのものを捉え直すために、次の３つの視点からその概念の整理を試みた。

①「老い」の観点

老いには、「老いそのものの現象」と、「個々人で語られる老い」がある。それは、現象を事実として捉える「客観的老い」と、事実を個々が意味づけする「主観的老い」である。

加齢に伴って肉体的、精神的、あるいは社会的な変化が起こる。客観的角度で見た老いは、加齢に伴うその現象の事実である。加齢に伴って起こる現象が、特定の個人的主観の考えや評価から独立で、普遍性を持つものが「客観的老い」である。

一方、主観的角度で見た老いは、加齢に伴って起こる変化の事実をどう解釈するか、受け止めるかである。加齢による変化を自己の感覚、意識で捉え、行為の担い手として、加齢する自我についての意識が「主観的老い」である。この２つ観点から老いを捉えることができる。

②「老い」と時間

次ぎに、老いという現象が、時間とどのような関わりを持って捉えられるか、という点が考えられる。

一つは老いを時間とは切り離し「古さ」と捉える見方があり、もう一つは老いを時間の経過やその過程という「連続した時間」として捉える見方がある。

「老醜」や「老衰」といった言葉が持つイメージに代表されるように、老いたものに固有の性格を結びつけるネガティブな固定観念があると同時に、「老練」や「老熟」という言葉で表現されるような、古いものや蓄積されたものに価値を見出すポジティブな評価が存在する。ここに老いの両義性がある。

③「老い」の主体

また、「老い」の主体が誰であるのか、ということでその捉え方は変わる。自己の老いと他者の老いではその捉え方が異なるのである。人はそれぞれ生きている年数や経験、価値観、人生環境が違う。従って、加齢に伴う現象の顕れ方も、その解釈の仕方もそれぞれに異なり、自己の中に形成される老いと、他者の中に形成される老いには違いがある。老いの主体が誰であるのかによって、その視点は変わるのである。

これらを整理し、老いへの視点を考えてみたものが表－１である。

老いへの視点	自己の老い		他者の老い	
	古さ	連続した時間	古さ	連続した時間
客観的老い（加齢に伴う肉体的・精神的・社会的変化の事実）				
主観的老い（加齢に伴う変化の受け止め方・人生観・生き方）				

↓

老いの両義性

表－１　老いへの視点

老いは多義的であり、老いの主体が、その主観においてどのように老いを捉えるかによって、ポジティブにもネガティブにも映る。私たちは日常生活の中で、他者の老いと向き合うが、それには、自己の老いへの視点とは異なった視点で他者の老いと向き合う必要がある。特に、他者が主観で老いをどう捉えているか、という視点を持つ必要がある。他者が今、有している「古さ」と同時に、そこへ達するまでの「時間の経過や過程」も「老い」なのであり、その変化の事実が「客観的老い」であり、老いの主体者がその事実をどう受け止めるか、という生き方や人生観の中にある「主観的老い」を捉えていく必要があるのである。

３.「老いの学習」の理論

１）学習としての社会化

老いはどのように学習されうるのだろうか。

学習とは自己の変容をもたらす行為である。行動の変容の過程は、自己システムの修正から自己の形成へと発展し、やがて人生観、世界観の変容をもたらす。老いの学習の「学習」とは、老いという人生の変化の過程を認識し、それによって自己の行動、生き方に変容をもたらすプロセスである。本研究では、「学習」を社会化のプロセスとして捉え、人間が、所与の社会ないし、社会集団の諸様式を社会の中で十分機能することができるように体得していく過程として考えていく。

近年の社会学の見方として「社会化」は自らを社会組織の一員として理解することを学ぶ過程に入る「文化化」、そして社会的、文化的複合体として人間能力を身につけ、主体的に生きていく過程に入る「人格化」とする広義の社会化への深まりがみられる。また、人間の発達が、受胎から死に至る生涯にわたる過程であるという認識に立つライフコース研究の中では、人間はどの時間でもその価値を変える可能性を持っているという「生涯にわたる社会化」が論じられてきた。人間のそれぞれの成長、発達段階によって、その個体は心身の構造や機能が変化し、また社会の期待する行動様式も異なる。従って、人間の生涯は、役割の取得、変容、放棄という役割移行の過程と捉えることもできる。

２）将来を見越しての社会化

マートン（R.K.Merton）は、「将来を見越して行われる社会化（予期的社会化）」の概念を提唱した[1]。予期的社会化とは「将来参加するであろう社会のシステムの価値や規範、あるいは将来付与されたり獲得するであろう位置や役割に関する知識や態度、技能などを学習すること[2]」である。この過程が人生全体を見通した個人の発達を可能にしている。人生過程は多くの予期的社会化を含んでいるのである。

人間の生涯は、年齢による発達段階に応じてカテゴリー化される見方が一般化している。このような見方では、暦年齢が基準となり一定の幅を持って区分けされた「～期」という人生段階を順に経て、生涯が構成されている。加齢に伴う社会的移行は、暦年齢の成長に応じた「～期」から「～期」への社会化という見方で捉えられてきた。私たちは、種々のライフイベントが暦年齢で区分けされた時期のどの時期にくる「べき」か、という規範を持っており、その移行を当然とする人生モデルに社会化しているのである。この人生移行モデ

ルに社会化されているからこそ、人生の見通しが立てられ、次に訪れる人生段階を予期し、役割の移行に向けて準備をするのである。

このカテゴリー化された人生移行モデルでは、老いは高齢期における現象として扱われる。高齢期に老いの問題が浮上し、高齢期という時期にどう適応していくか、社会化していくべきかが課題とされる。しかし、人が年を重ねて老いていくという現象は高齢期だけの課題ではない。それは、どう年を重ねていくか、どう老いていくかという生き方の問題になるのである。老いを考える時、高齢期に社会化するというよりむしろ、老いという人生過程への社会化という視点で捉えていくべきなのである。

3）老いへの社会化

老いへの社会化とは、高齢期への社会化とは異なる概念である。なぜならば、人が年を重ねて老いていく現象は高齢期だけにあるわけではないからである。老いは高齢期に起こる推移を表わしているだけではない。老いというものは年齢の基準による確固たる定義があるのではなく、社会によって、個人によって異なる。高齢期の在り方は、むしろ高齢期以前の生き方の問題になるのである。

老いへの社会化は、自己の内に老いの価値が形成されていく学習である。老いを人生過程の中で捉え、老いの知識、価値、態度の形成とそれに基づく変容過程のことである。第一に、個人が老いを知覚し、認識する様式としての知識や情報を得ること。第二に、老いを評価する際に使用する判断規準としての価値を得ること。そして第三に、高齢期や高齢者に対する見方やイメージとしての態度を得ることである。

老いへの社会化において、老いを評価する判断基準としての価値に両義性が生まれる。個々人の持つ主観的な老いの価値をどのように作るかによって、老いはポジティブな捉えられ方をしたり、ネガティブな捉えられ方をしたりするのである。老いという過程によって、将来、人がどのように変化していくのか、あるいは自分はどう変化していきたいのか、という「予期」をすることによって、老いの価値や規範を習得していく。これが老いへの社会化という視点である。

老いへの社会化は、意図的に機会を提供すればフォーマルな社会化の形式を踏むことになるが、本来ならば、生活の中のインフォーマルな社会化によって形成されていくべきものである。フォーマルな社会化は一時的、あるいは限定的なものとなりやすく、それはまねや模倣というもので対応することができる。しかし、インフォーマルな社会化は、行動の規範や基準がそれほど明白ではなく、広く拡散した資源を自分で統合していかなければならないため、より完全に内面化していくプロセスとなるのである。老いへのフォーマルな社会化は、まねや模倣による「社会的望ましさ」の形成に繋がりやすくなる。つまり、老いに対し「社会的に望ましい」とされる見方の形成が、まねや模倣という形で形成され、一時的に作られるに過ぎなくなるということである。

社会化には社会化を行う「担い手」が存在する。担い手の有する価値や規範、役割のモデルを内面化することで社会化されるのである。老いへの社会化には確固とした準拠集団や役割の規範は存在しない。老いの予期的社会化を起こす担い手となる先行世代との関わりによって、老いを内面化していくことが重要なのである。

4.「老いの学習」の現状

本来ならば、日常生活でインフォーマルな老いへの社会化がなされるべきであるが、社会環境の変化により、その機会は失われている。子どもたちにとって、異年齢の関わり、特に年齢差の大きな人間との日常的な関わりは減少していく傾向にある。それゆえに、学

校教育というフォーマルな状況において、インフォーマルな老いの学習過程を創造していくことが期待される。

しかし、学校教育というフォーマルな社会化の環境の中では、老いと子どもたちの関係が一つの角度で捉えられる傾向にある。それは、1970年代から取り組みが始められた福祉教育の施策が大きく関係している。福祉教育の導入によって、老いというものが、自己も含めた生物学的加齢現象としての扱いよりも、高齢社会や高齢者福祉の問題の中で捉えられる傾向を強めたのである。

福祉教育は、1970年代、受験体制に縛られた知識偏重の教育や、個性のない画一教育への見直しが叫ばれる中、人間の豊かさ、暖かさに触れる教育として、その必要性が唱えられた。近年でも、「生きる力の涵養」「週休５日制の導入による地域との連携」「総合的な学習の時間」などの教育施策が、さらに高齢者福祉中心の福祉教育が取り上げられる動きを強めることになった。少子高齢社会が到来し、これからの子どもたちが高齢社会の中で生きていかざるをえないことは事実であるが、学校教育における偏った高齢者福祉教育の取り組みによって、子どもたちが「年を重ねていく」「高齢になる」「老い」ということそのものを学ぶことなしに、高齢者をいたわりの対象として捉えていくシステムができあがってしまったのである。

福祉教育に登場する高齢者は、福祉の客体（対象）であり、子どもたちはそこに「やさしさ」や「いたわり」という社会的に望ましいとされる眼差しを向けるように指導される。「年を重ねること」や「老い」のイメージはここに重ねられていくのである。

インフォーマルな社会化を促すための「先行世代とのかかわり」という点からいえば、子どもたちと高齢者との交流が注目され、老いの学習の一つの方法として考えられる。しかし、これらの世代間交流事業も福祉教育としての一環として取り上げられていることが多く、教育現場では、「高齢者との交流＝福祉教育実践」として捉えられる傾向が強いのである。

５.「老いの学習」の実践

近年、学校教育などの現場で取り込まれている、高齢者と子どもの世代間交流にはいくつかの型があり、それらは私たちの持つ敬老思想や民俗心象といった文化の影響が強く現われている[3]。これらの交流事業では、高齢者は型にはまったイメージでの関わりしかなく、世代間交流事業そのものがステレオタイプ化しているといえる。また、福祉政策において、高齢者と子どもの生活空間を統合し、世代間交流を計ろうとする試みも目立ってきたが、まとめて面倒を見る効率性を重視したかのようにも映る。このような交流のあり方では、老いという現象そのものを抜き出して考えるような試みにはなりにくいのである。

老いの学習の先駆的な実践事例として、アメリカの学校教育で展開されている老いの学習のプログラムが注目される[4]。参考として、プログラムの一事例を挙げておきたい。Aging Course[5] は小学生向けのプログラムである。

事例：Aging Course

"Aging Course"は、４つのユニットから構成された全 10.5 時間のプログラム。それぞれのユニットが「活動」と結びつき、高齢者とのふれあいが強調されている。

老いの社会的側面　３時間
（Social aspects of aging）
産業社会の急速な変化の中での高齢者の雇用、退職、経済的問題を話し合う。その中でAARPやGray Pantheres（グレイパンサーズ）などの高齢者の社会活動により、高齢者の政治的認知が増大していることや、多くの学習の機会があることなどを学ぶ。子どもたちは直接市民活動をする高齢者に会ってインタビューをする授業を行なう。これは子どもたちと高齢者のポジティブな交流の機会となる。

歴史的、経済的出来事　２時間
（Historical and economic events）
産業の発展や、歴史的に大きな出来事がどのように

関係し、コーホートの経験に影響をするのかを学習する。例えば、エネルギー危機が起こったとしたら高齢者、両親の世代、10、11歳の子ども（自分たち）それぞれに、どのような影響するのかを話し合う。また、高齢者職業紹介担当者を招きながら、高齢者への政策、社会保障、住居の問題、高齢者が雇用問題（多くの高齢者が働く意欲や必要性を持っている）について話し合う。

老いの身体的側面　２時間
（Physical aspects of aging）
自分で描く自分の身体の絵を通し、それを応用しながら、通常のエイジングについての理解を深める。そして高齢者とは身体的にどうであるかを話し合い、通常のエイジングにともなう「喪失」やその個人差について理解する。

社会的役割の変化と喪失　２時間
（Social roles ,changes ,and losses）
ライフスパンと社会的役割の関係について理解する。子どもの頃には責任がないが大人になると（親や社会人になる）と責任を持たなくてはならないが、高齢者は自己に対する責任（身体的経済的独立）を越えて他人への責任はなくなっていく、という過程を学習する。

映画鑑賞とシニアセンターへの訪問　1.5時間
（film and senior center visit）
映画 "Close Harmony"（65歳以上のメンバー150人によるコーラスを描いた心温まる実話：1981年アカデミー賞短編作品賞受賞作品）の鑑賞。
また、シニアセンターへの訪問は、現代的な高齢者の成長、発展しつづける「老い」の側面と関わることができる。子どもたちにはあらかじめ高齢者の写真付き冊子を用意し、そこへ高齢者の話をきいて、彼らがどんな人であるのかを尋ねて書き込んでいく。そして後で発表し、歌を歌うなどして友好を深める。

アメリカは若さを中心とした文化を持っており、高齢者に対するエイジズムが問題となった。エイジズム是正の方策の一つとして、老いを学習するプログラムがその役割を果たしている。子どもたちにとって、老いや高齢者の存在をあたりまえの自然な現象として捉えらえるような学習機会の提供である。

アメリカにおける老いの学習プログラムでは、老いを理論的に学習していく単元を講義や活動といった形で具体化している。報告されている事例を考察していくと、具体的実践では以下の３つの要素が盛り込まれ、構成されていることが多い。

（１）老いの理論的学習
（２）高齢者との共同活動
（３）子ども自身の表現活動

このようなプログラムは、幼い段階から老いを「発達」の中で捉える姿勢があり、その老いの現象を多角的に捉えていることが特徴である。また、学習者である子どもたち自身が、老いに対する考えを議論したり、考えを分かち合うために表現活動を取り入れている。

わが国の場合、世代間交流事業は異世代が空間を共にする活動が中心であって、形式的なものに限られてしまっている。また、高齢者は画一的な役割しか与えられず、多くが物知りや賢者、伝統技術の伝達者として登場する。アメリカの実践例で示されるように、子どもたちが老いを学ぶにあたって、直接的な高齢者との交流ばかりが強調される必要はない。そして、高齢者は年齢を重ね生きてきた経験を踏まえ、より老いている人間としてその生き方をみせれば良いのである。それは、この時代に老いがどうあるのか、どう老いていくのかという文化を伝えることになる。

わが国において学校教育を中心として展開される世代間交流事業は、私たちの持つ文化の影響を大きく受けている。それは「敬老の国」と評される日本の文化を継承する重要な要素を内包してはいるが、その型に縛られている限りは、老いへの価値観が多様化していくことはできない。老いを客観的に捉え直し、そこに個々の価値を見つけていくような学習のあり方を考えていく必要がある。

６．今後の課題

老いには衰退のイメージが先行する。しかし、老いは多義的であり、多角的な捉え方ができる。そして老いとは、結果であると同時に過程なのである。様々な角度で老いを捉えていく中で、自己の内面に老いの価値が形成されていくべきである。

老いの価値を形成するための学習とは、本来ならば日常生活において、先行世代との関わりや、その歩んだ道のりを眺めることで暗黙的に自己の内に形成されていく社会化の過

程である。しかしながら、現代社会における人間関係の希薄さから、若い世代が老いの内面化する機会は失われてきた。高齢社会に突入していく中で、1970年代から教育現場で展開されてきた「老いの学習」の機会は、「自己の老い」への視点ではなく、むしろ自己の一方的な主観で捉える「他者の老い」であった。高齢者をいたわりの対象として捉える教育が、「社会的望ましさ」で形成された老いへの眼差しを助長したのである。昨今、子どもたちが高齢者と接する機会として盛んに取組まれてきている「世代間交流」という事業は、老いを偏った視点で捉えているものが少なくない。

世代間交流を老いの学習の機会として捉えるならば、老いに多角的な視点を向けるべきである。アメリカにおいて実践されている先駆的な研究事例を参考にし、視野を広げ、老いの学習の実践に取組んでいくべきである。

【注】

1）R.K.マートン、森東吾ほか共訳、『社会構造と社会理論』、みすず書房、1961

2）『新社会学辞典』(「予期的社会化」の項)、有斐閣、1993

3）世代間交流を構成する背景については、拙稿『老いの学習に関する研究』、文教大学大学院人間科学研究科生涯学習学専攻修士論文、2001、pp.65-69で詳しく述べている。

4）アメリカにおける老いの学習プログラム“aging education”については、拙稿、前掲、pp.80-89を参考。

5）Joan N.Scott., "Aging Introduction Offers News Challenges for Social studies Hours".
HEALTH EDUDATION
FEBRUARY／MARCH., 1986

【参考文献】

(1)菊池章夫、斉藤耕二編『社会化の理論 人間形成の心理学』、有斐閣双書、1979

(2)柴野昌山編、『文化伝達の社会学』、世界思想社、世界思想社、2001

(3)阪野貢編著、『福祉教育の理論と実践－新たな展開を求めて－』、相川書房、2000

(4)I.ロソー、嵯峨座晴夫監訳、『高齢者の社会学』、早稲田大学出版、1983

(5)財団法人長寿社会開発センター、『世代間交流の理論と実践』、1996

(6)Ronald H.Sherron＆D.Barry Lumsden., Introduction to educational gerontology, New York Hemisphere Pub 1990